新春に寄せて

グローバルな視点 “発想の転換”が“辰”の矛先を決める

株式会社ジョンクェルコンサルティング
代表取締役 落合 以臣

我が国を取り巻く環境は、EU諸国の経済的危機、中東諸国沿岸の政治的崩壊、BIRICS諸国の経済成長の鈍化、朝鮮半島の緊張、ロシアの選挙疑惑、場当たり的な中国政策、米国経済の先行き不透明感など、数多くのリスクに満ちていると言っても過言ではないでしょう。とりわけ、未曾有のクライシスと言われた東関東大震災から年を越し、再生に向けて新たなスタートを切ったはずですが、なかなか浮上できない状況にいると言えます。本来であれば、どの企業もいち早く新たな展開に向けて舵をきればいいところ、企業構造のあまりの重さに辟易するのみで、なかなか前進することができないようです。この背景には、企業が積み重ねてきた前向きな言い方では企業文化、後退的な言い方では閉塞的組織と言えるのではないでしょうか。いずれにしても今までの延長線上では、何ひとつ解決できないことは、身を持って体験したはずです。また、粛々とした方法だけでは時空を超越することができないことも学びました。

こうした何とも言えないもどかしさを打破して、新たな展開に向かって舵を切るためには、旧態依然としたことから、すべてをリセットすることも考えられますが、これほど難しい選択はないはずです。だとすれば、ひとつの方法として“発想の転換”を取り入れたらどうだろうか。発想の転換は、ものの考え方の出発点を、旧来の延長線上ではなく、一新して臨む事を指すと言われます。この発想の転換という意味を企業流に置きなおしてみますと、新たな情報、事実などを見ることによって見るものの生命力を盛んにし、それがきっかけになって物事が始まると言い換えることができます。では、なぜ発想の転換が必要なのだろうか？それは、グローバルに流動化が進み、特に、情報・資金移動等は世界中が一体化しつつあることは周知の通りです。現在の状況変化は、明治維新に匹敵するか、それを上回るとの堅い認識が絶対不可欠であるはずです。少しずつ変えて行こうとの国内的視野での旧来延長線型政策は、結局、「財政赤字の累積」というかたちのツケが回り、国家運営がまさに行き詰らんとしています。したがって、グローバルな視野に立って解決していかざるを得ない状況になっていることがわかるはずです。

このように、いろいろな状況を勘案しますと、20世紀から21世紀へバトンタッチして丁度干支的にひと回りした今年2012年は、グローバリゼーション元年として昇り龍のように天高く羽ばたいてもいいのではないだろうか。この *JQ International Review* を愛読される方の背中を押すことができれば幸いです。

All Rights Reserved. Copyright © 2012 Jonquil Consulting Inc.